新型コロナ　「鎖国」で解決する？

写真は外出禁止令が出た 17 日のローマ。朝日新聞 3 月 25 日朝刊「オピニオン」、世界エイズ・結核・マラリア対策基金(グローバルファンド)戦略投資効果局長の國井修さん標題インタビューの一部を紹介したい。「人消えた欧州の街 恐怖が増幅され 政治判断で強硬策」「国境なき感染症　新たな病に備え 途上国にも目を」という見出し。

「感染症に国境はありません。新興感染症の多くが低・中所得国で発生しており、今回のように先進国に広げないためにも、国際的な支援が必要です。地球全体を見れば、感染症で多くの人々の命が奪われる地域があり、大きな健康格差があるのはおかしいという人道的な考え方もあるでしょう」

「途上国側には、感染症対策を含め、国民の命や健康を守ることを最優先課題にするという政治的意思が求められます。援助だけに頼らず、国内資金を保健医療に配分して、人材育成を含む保健医療システム構築に注力すべきです」

「日本は人間の安全保障を提唱し、G7、G20 などでも保健医療の重視を訴えてきました。ただ、実は日本政府の途上国援助に占める保健医療の割合は 5%程度で、米国の 27%や英国の 20%に比べてかなり低いのです。世界の牽引役として保健援助資金を増やしてもよいと思います」

「新型コロナとの闘いはまだ終わっていませんが、今回のようなパンデミックは今後も起こりえます。昔なら地方の風土病で終わっていたものが、都市化や交通の高速化、地球環境の変化などで世界に広がるようになっています。そうした新興感染症が出現する背景要因も含め、総合的に考えていかないと。単に自分の国に入るか、流行したらどうするかという視点だけでは解決になりません」

「新たなコロナウィルスか、新型インフルエンザか、全く新たな病原体か。抗生物質の過剰使用による新たな耐性菌は確実に増え、地球温暖化で蚊の生息域が広がりマラリアの流行拡大も報告されています。途上国などでの対岸の火事ではなく、自分事として真剣に準備する必要があります」

「微生物からすれば、自らの生存のために変異しながら人間への親和性を高めているのかも知れません。環境や自然を含む地球の健康と人類の健康を総合的に考える『プラネタリーヘルス』を発展させ、人類と微生物との共存を構築することも大事だと考えます」　　「各国、各地域で新型コロナ対策をしっかりすることは今必要です。一方で、それ以上の子どもがマラリアや麻疹で死んでいる国もあり、アフリカの 15～44 歳の女性の死因の第 1 位は HIV です。それらの感染症で新型コロナの数百倍の人が死んでいながら、対策が十分にできない国もある、といった現実も知ってほしい。世界で隠れて見えないものをもう一度見直してほしいのです」

(2020 年 3 月 28 日)